

# 春

芥川龍之介

青空文庫



ある花曇りの朝だった。広子<sup>ひろこ</sup>は京都<sup>きょうと</sup>の停車場から東京行<sup>ゆき</sup>の急行列車に乗った。それは結婚後二年ぶりに母親の機嫌<sup>きげん</sup>を伺<sup>うかが</sup>うためもあれば、母かたの祖父の金婚式へ顔をつらねるためもあった。しかしまだそのほかにもまんざら用のない体ではなかった。彼女はちようどこの機会に、妹の辰子<sup>たつこ</sup>の恋愛問題にも解決をつけたいと思っていた。妹の希望をかなえるにしろ、あるいはまたかなえないにしろ、とにかくある解決だけはつけなければならぬと思っていた。

この問題を広子の知つたのは四五日前に受け取つた辰子の手紙を読んだ時だった。広子は年ごろの妹に恋愛問題の起つたことは格別意外にも思わなかつた。予期したと言うほどではなかつたにしろ、当然とは確かに思つていた。けれどもその恋愛の相手に篤介あつすけを選んだと言うことだけは意外に思わずにはいられなかつた。広子は汽車に揺ゆられている今でも、篤介のことを考えると、何か急に妹との間に谷あいの出来たことを感ずるのだった。

篤介は広子にも顔馴染かおなじみのあるある洋画研究所の生徒だった。

処しよ女時代の彼女は妹と一しよに、この画の具だらけの青年をひ

そかに「猿さる」と譚名あだなしていた。彼は實際顔の赤い、妙に目ばかりかがや赫かがやかせた、——つまり猿じみた青年だった。のみならず身なりも

貧しかった。彼は冬も金きん釦ボタンの制服に古いレエン・コオトをひっかけていた。広子は勿論もちろん篤介に何の興味も感じなかった。辰子も——辰子は姉に比べると、一層彼を好まぬらしかった。あるいはむしろ積極的に憎んでいたとも云われるほどだった。一度なども辰子は電車に乗ると、篤介の隣りに坐ることになった。それだけでも彼女には愉快ゆかいではなかった。そこへまた彼は膝ひざの上の新聞紙包みを拈ひろげると、せっせとパンを嚙かじり出した。電車の中の人々の目は云い合せたように篤介へ向った。彼女は彼女自身の上にも残酷ざんこくにその目の注そそがれるのを感じた。しかし彼は目まじろぎもせず悠々とパンを食いつづけるのだった。……

「野蛮人やばんじんよ、あの人は。」

広子はこのことのある後、<sup>のち</sup>こう辰子の罵つたのをいまさらの  
ように思い出した。なぜその篤介を愛するようになったか？――  
それは広子には不可解だった。けれども妹の<sup>きしつ</sup>氣質を思えば、一旦  
篤介を愛し出したが最後、どのくらい情熱に燃えているかはたい  
てい想像出来るような気がした。辰子は物故<sup>ぶつこ</sup>した父のように、何  
ごとにも一<sup>いち</sup>図<sup>ず</sup>になる氣質だった。たとえば<sup>あぶらえ</sup>油<sup>あぶらえ</sup>画<sup>え</sup>を始めた時にも、  
彼女の夢中になりさ加減は家族中の予想を<sup>ちようえつ</sup>超<sup>ちようえつ</sup>越<sup>えつ</sup>していた。彼  
女は<sup>きやしや</sup>華<sup>きやしや</sup>奢<sup>しや</sup>な画の具箱を小脇<sup>こわき</sup>に、篤介と同じ研究所へ毎日せつせ  
と<sup>かよ</sup>通<sup>かよ</sup>い出した。同時にまた彼女の居間<sup>いま</sup>の壁には一週に必ず一枚ず  
つ新しい油画がかかり出した。油画は六号か八号のカンヴァスに  
人体ならば顔ばかりを、風景ならば西洋風の建物を描<sup>えが</sup>いたのが多

いようだった。広子は結婚前の何箇月か、——殊に深い秋の夜<sup>よ</sup>などにはそう云う油画の並んだ部屋に何時間も妹と話しこんだ。辰子はいつも熱心にゴオグとかセザンヌとかの話をした。当時どこかに上演中だった武者小路<sup>むしやのこうじ</sup>氏の戯曲の話もした。広子も美術だの文芸だのに全然興味の無い訣<sup>わけ</sup>ではなかった。しかし彼女の空想は芸術とはほとんど縁のない未来の生活の上に休み勝ちだった。目はその間も額<sup>がくぶち</sup>縁<sup>えん</sup>に入れた机の上の玉葱<sup>たまねぎ</sup>だの、繻<sup>ほうたい</sup>帯<sup>たい</sup>をした少女の顔だの、芋<sup>いも</sup>畑<sup>ぼたけ</sup>の向うに連<sup>つらな</sup>った監獄<sup>かんごく</sup>の壁だのを眺めながら。……

「何<sup>なん</sup>と言うの、あなたの画<sup>え</sup>の流儀は？」

広子はそんなことを尋<sup>たず</sup>ねたために辰子を怒<sup>おこ</sup>らせたのを思い出し

た。もつとも妹に怒られることは必ずしも珍らしい出来事ではなかつた。彼等は芸術の見かたは勿論、生活上の問題などにも意見の違うことはたびたびあつた。現にある時は武者小路氏の戯曲さえ言い合いの種になつた。その戯曲は失明した兄のために犠牲<sup>ぎせいて</sup>的<sup>き</sup>の結婚を敢てする妹のことを書いたものだつた。広子はこの上演を見物した時から、（彼女はよくよく退屈しない限り、小説や戯曲を読んだことはなかつた。）芸術家肌の兄を好まなかつた。たとい失明していたにしろ、按摩<sup>あんま</sup>にでも何<sup>なん</sup>にでもなれば好いのに、妹の犠牲を受けているのは利己主義者であるとも極言した。辰子は姉とは反対に兄にも妹にも同情していた。姉の意見は嚴<sup>げん</sup>肅<sup>しゆく</sup>な悲劇をわざと喜劇に翻訳する世間人の遊戯であるなどとも言つ



た。こう言う言い合いのつものつた末には二人ともきつと怒り出した。けれどもさきに怒り出すのはいつも辰子にきまっていた。広子はそこに彼女自身の優越ゆうえつを感じずにはいられなかった。それは辰子よりも人間の心を看破かんぱしていると言う優越だった。あるいは辰子ほど空疎な理想に捉とらわれていないと言う優越だった。

「姉さん。どうか今夜だけはほんとうの姉さんになって下さい。聡明そうめいないつもの姉さんではなしに。」

三度目に広子の思い出したのは妹の手紙の「いちぎよう行いだった。その手紙は不相あいかわらず変白い紙を細かいペンの字に埋うずめていた。しかし篤介との関係になると、ほとんど何ごとも書いてなかった。ただ念入りに繰り返し返してあるのは彼等は互に愛し合っていると云う、

簡単な事実ばかりだった。広子は勿論行ぎようの間に彼等の關係を讀もうとした。實際またそう思つて讀んで行けば、疑わしい個所もないではなかつた。けれども再さい応おう考こうえて見ると、それも皆彼女の邪じやすい推いらしかつた。広子は今もとりとめのない苛いらだ立たしさを感じながら、もう一度何か憂鬱ゆううつな篤介の姿を思い浮べた。すると急に篤介の匂におい——篤介の体の発散する匂は干ほし草くさに似ているような気がし出した。彼女の經驗に誤りがなければ、干し草の匂のする男性はたいいてい浅ましい動物的本能に富んでいるらしかつた。広子はそう云う篤介と一しよに純粹な妹を考えるのは考えるのに堪えない心もちがした。

広子の聯想れんそうはそれからそれへと、とめどなしに流れつづけた。

彼女は汽車の窓まじぎわ側にきちりと膝ひざを重ねたまま、時どき窓の外へ目を移した。汽車は美濃みのの国くに境ぎかいに近い近江おうみの山峡やまかいを走っていた。山峡には竹藪たけやぶや杉林の間に白じろと桜の咲いているもの見えた。「この辺へんは余ほど寒いと見える。」——広子はいつか嵐あらしや山やまの桜も散り出したことなどを思い出していた。

## 二

広子ひろこは東京へ帰った後のち、何かと用ばかり多かつたために二三日の間は妹とも話をする機会を捉とらえなかつた。それをやつと捉とらえたのは母かたの祖父の金婚式から帰つて来た夜よるの十時ごろだった。

妹の居間いまには例の通り壁と云う壁に油画あぶらえがかかり、畳に据すえた  
 円卓えんたくの上にも黄色い笠をかけた電燈が二年前の光りを放つてい  
 た。広子は寝間着ねまきに着換えた上へ、羽織もんだけ紋のあるのをひつか  
 けたまま、円卓の前の安楽椅子あんらくいすへ坐つた。

「ただ今お茶をさし上げます。」

辰子たつこは姉の向うに坐ると、わざと真面目まじめにこんなことを言つた。

「いえ、もうどうぞ。——ほんとうにお茶なんぞ入いらないことよ  
 」。――

「じゃ紅茶でも入れましようか？」

「紅茶も沢山。——それよりもあの話を聞かせて頂戴ちようだい。」

広子は妹の顔を見ながら、出来るだけ気軽にこう言つた。と言

うのは彼女の感情を、——かなり複雑な陰影を帯びた好奇心の非難だのあるいはまた同情だのを見透かされな<sup>みす</sup>いたためもあれば、被告じみた妹の心もちを<sup>らく</sup>楽にしてやりたいためもあったのだ<sup>ら</sup>った。しかし辰子は思いのほか、困<sup>ら</sup>つたらしいけはいも見せなかつた。いや、その時の彼女のそぶりに少しでも変化があつたとすれば、それは浅黒い顔のどこかにほとんど目にも止らぬくらい、<sup>きんちよ</sup>緊張<sup>う</sup>した色が動いただけ<sup>ら</sup>だった。

「ええ、ぜひわたしも姉さんに聞いて頂きたいの。」

広子は内心プロロオグの簡単にすんだことに満足した。けれども辰子はそう言<sup>い</sup>つたぎり、しばらく口を開<sup>ひら</sup>かなかつた。広子は妹の沈黙を話し悪<sup>にく</sup>いたためと解釈した。しかし妹を<sup>うなが</sup>促すことはちよつ

と残酷ざんこくな心もちがした。同時にまたそう云う妹の羞恥しゆうちを享樂きやうらくしたい心もちもした。かたがた広子は安樂椅子の背に西洋せいよう髪がみの頭を靠もたせたまま、全然当面の問題とは縁のない詠嘆の言葉を落した。

「何だか昔に返ったような気がするわね、この椅子にこうやって坐つていると。」

広子は彼女自身の言葉に少女じみた感動を催しながら、うっとり部屋の中を眺めまわした。なるほど椅子も、電燈も、円卓も、壁の油画も昔の記憶の通りだった。が、何かその間に不思議な変化が起つていた。何か？——広子はたちまちこの変化を油画の上に発見した。机の上の玉葱たまねぎだの、繻帶ほうたいをした少女の顔だの、

芋いも 畠はたけの向うの監獄だのはいつの間にかどこかへ消え失せていた。あるいは消え失せてしまわないまでも、二年前には見られなかった、柔かい明るさを呼吸していた。殊に広子は正しょう面めんにある一枚の油画に珍らしさを感じた。それはどこかの庭を描いた六号ばかりの小しょう品ひんだった。白茶しらちやけた苔こけに掩おおわれた木々と木末こずえに咲いた藤の花と木々の間に仄ほのめいた池と、——画面にはそのほかに何もなかった。しかしそこにはどの画えよりもしつとりした明るさが漂ただよっていた。

「あなたの画、あそこにあるのも？」

辰子は後うしろを振り向かずに、姉あねの指ゆびした画を推察した。

「あの画？ あれは大村おおむらの。」

大村は篤介の苗字みょうじだった。広子は「大村の」に微笑を感じた。が、一瞬間うらや羨ましさむとんじやくに似た何ものかを感じたのも事実だった。しかし辰子は無頓着むとんじやくに羽織の紐ひもをいじりいじり、落ち着いた声に話しつづけた。

「田舎いなかの家うちの庭を描かいたのですって。——大村の家は旧家なんですって。」

「今は何をしているの？」

「県会議員なんか何かでしょう。銀行や会社も持っているようよ。」

「あの人は次男か三男かなの？」

「長男——って云うのかしら？ 一人きりしかいないんですって。」

。」



広子はいつか彼等の話が当面の問題へはいり出した、——と言  
うよりもむしろその一部を解決していたのに気がついた。今度の  
事件を聞かされて以来、彼女の気がかりになっていたのはやはり  
篤介の身分みぶんだった。殊に貧しげな彼の身なりはこの世俗的な問題  
に一層の重みを加えていた。それを今彼等の問答は無造作むぞうさに片づ  
けてしまったのだった。ふとその事実じつじに気をついた広子は急に常  
談ようたんを言う寛くわんぎを感じた。

「じゃ立派りっぱな若旦那様なのね。」

「ええ、ただそりやボエムなの。下宿げしゆくも妙なところにいるの  
よ。羅紗屋らしやの倉庫そうこの二階を借りているの。」

辰子はほとんど狡猾こうかつそうにちらりと姉へ微笑を送った。広子

はこの微笑の中に突然一人前の女を捉えた。もつともこれは東京駅へ出迎えた妹を見た時から、時々意識へ上ることだった。けれどもまだ今のように、はつきり焦点の合ったことはなかった。広子はその意識と共にたちまち篤介との関係にも多少の疑惑を抱き出した。

「あなたもそこへ行つたことがあるの？」

「ええ、たびたび行つたことがあるわ。」

広子の聯想は結婚前のある夜の記憶を呼び起した。母はその夜風呂にはいりながら、彼女に日どりのきまつたことを話した。

それから常談とも真面目ともつかずに体の具合を尋ねたりした。生憎その夜の母のように淡白な態度に出られなかった彼女

は、今もただじつと妹の顔を見守るよりほかに仕かたはなかつた。しかし辰子は不相<sup>あいかわらず</sup>変落<sup>おち</sup>ち着いた微笑を浮べながら、眩<sup>まぶ</sup>しそうに黄色い電燈の笠へ目をやっっているばかりだった。

「そんなことをしてもかまわないの？」

「大村が？」

「いいえ、あなたがよ。誤解でもされたら、迷惑じゃなくって？」

「どうせ誤解はされ通しよ。何しろ研究所の連中と来たら、そりや口がうるさいんですもの。」

広子はちよつと苛<sup>いらだ</sup>立たしさを感じた。のみならず取り澄ました妹の態度も芝居ではないかと言う猜<sup>さい</sup>疑<sup>ぎ</sup>さえ生じた。すると辰子は弄<sup>もてあそ</sup>んでいた羽織の紐<sup>ひも</sup>を投げるようにするなり、突然こう言う問<sup>と</sup>を

発した。

「母さんかあは許して下さるでしょうか？」

広子はもう一度苛いらだ立たしさを感じた。それは恬てん然ぜんと切りこんで来る妹に対する苛立たしさでもあれば、だんだん受う太け刀だちになつて来る彼女自身に対する苛立たしさでもあつた。彼女は篤介の油画へ浮かない目を遊ばせたまま「そうねえ」と煮にえ切らない返事をした。

「姉さんから話していただけない？」

辰子はやや甘えるように広子の視線を捉とらえようとした。

「わたしから話すつたつて、——わたしもあなたたちのことは知らないじゃないの？」

「だから聞いて頂戴ちようだいって言っているのよ。それをちつとも姉さんは聞く気になつてくれないんですもの。」

広子はこの話のはじまった時、辰子のしばらく沈黙したのを話し悪にくいたためと解釈した。が、今になつて見ると、その沈黙は話し悪いよりも、むしろ話したさをこらえながら、姉の勧すすめるのを待っていたのだつた。広子は勿論後ろめたい気がした。

しかしまた咄嗟とつさに妹の言葉を利用することも忘れなかつた。

「あら、あなたこそ話さないんじゃないの？——じゃすつかり聞かせて頂戴。その上でわたしも考えて見るから。」

「そう？ じゃとにかく話して見るわ。その代りひやかしたり何かしちや厭いやよ。」

辰子はまともに姉の顔を見たまま、彼女の恋愛問題を話し出した。広子は小首こくびを傾けながら、時々返事をする代りに静かな点てんと頭うを送っていた。が、内心はこの間も絶えず二つの問題を解決しようと思っていた。その一つは彼等の恋愛の何のために生じたかと言うことであり、もう一つは彼等の関係のどのくらい進んでいるかと言うことだった。しかし正直な妹の話もほとんど第一の問題には何の解決も与えなかった。辰子はただ篤介と毎日顔を合せているうちにいつか彼と懇意こんいになり、いつかまた彼を愛したのだった。のみならず第二の問題もやはり判然とはわからなかった。辰子は他人の身の上のように彼の求婚した時のことを話した。しかもそれは抒情詩じょじょうしよりもむしろ喜劇に近いものだった。――

「大村は電話で求婚したの。可笑しいでしょう？ 何でも画に失敗して、畳の上どころがっついていたら、急にそんな気になったんですって。だっつていきなりどうだっつて言っただって、返事に困つてしまうじゃないの？ おまけにその時は電話室の外へ母さんも探したものに來ているんでしよう？ わたし、仕かたがなかつたから、ただウイ、ウイつて言つて置いたの。……」

それから？——それから先も妹の話は軽快に事件を追つて行つた。彼等は一しよに展覧会を見たり、植物園へ写生に行つたり、ある独逸のピアニストを聴いたりしていた。が、彼等の關係は辰子の言葉を信用すれば、友だち以上に出ないものだった。広子はそれでも油断せず妹の顔色を窺つたり、話の裏を考えたり、一

二度は鎌かまさえかかけて見たりした。しかし辰子は電燈の光に落ち着いた瞳ひとみを澄すませたまま、少しも臆おくした色を見せないのだった。

「まあ、ざっとこう言う始末しまつなの。——ああ、それから姉さんにわたしから手紙を上げたことね、あのことは大村にも話して置いたの。」

広子は妹の話し終った時、勿論齒痒はがゆいもの足らなさを感じた。けれども一通り打ち明けられて見ると、これ以上第二の問題には深入り出来ないのに違ちがいなかった。彼女はそのためによむを得ず第一の問題に縋すがりついた。

「だってあなたはあの人は大嫌だいきらいだって言っていたじゃないの？」



広子はいつか声の中にはいった挑戦ちようせんの調子を意識していた。が、辰子はこの間にさえ笑顔えがおを見せたばかりだった。

「大村もわたしは大嫌いだったんですって。ジン・コクテルくらいは飲みそうな気がしたんですって。」

「そんなものを飲む人がいるの？」

「そりやいるわ。男のように胡坐あぐらをかいて花を引く人もいるんですもの。」

「それがあなたがたの新時代？」

「かも知れないと思っっているの。……」

辰子は姉の予想したよりも遙はるかに真面目まじめに返事をした。と思うとたちまち微笑びしょうと一しよにもう一度話頭わとうを引き戻した。

「それよりもわたしの問題だね、姉さんから話していただけない？」

「そりや話して上げないこともないわ。上げないこともないけれども、——」

広子はあらゆる姉のように忠告の言葉を加えようとした。すると辰子はそれよりも先にこう話をせつだん截断した。

「とにかく大村を知らないじゃね。——じゃ姉さん、二三日中うちに大村に会っちゃ下さらない？　大村も喜んでお目にかかると思うの。」

広子はこの話頭の変化に思わず大村の油画を眺めた。藤の花はこけ苔ばんだ木々の間になぜか前よりもほのぼのとしていた。彼女は

一瞬間心の中に昔の「猿」を髣髴しながら、曖昧に「そうねえ」を繰り返した。が、辰子は「そうねえ」くらいに満足する気色も見せなかった。

「じゃ会って下さるわね。大村の下宿へ行って下さる？」

「だって下宿へも行かれないじゃないの？」

「じゃここへ来て貰いましょうか？ それも何だか可笑しいわね」。

「あの人は前にも来たことはあるの？」

「いいえ、まだ一度もないの。それだから何だか可笑しいのよ。」

「じゃあと、——じゃこうして下さらない？ 大村は明後日表慶

館へ画を見に行くことになっているの。その時刻に姉さんも表

慶館へ行つて大村に会つちや下さらない？」

「そうねえ、わたしも明後日ならば、ちようどお墓参りをする次ついで手もあるし。……」

広子はうっかりこう言つた後のち、たちまち軽率けいそつを後悔した。けれども辰子はその時にはもう別人べつじんかと思うくらい、顔中に喜びみなぎを漲みなぎらせていた。

「そうお？　じゃそうして頂戴ちようだい。大村へはわたしから電話をかけて置くわ。」

広子は妹の顔を見るなり、いつか完全に妹の意志の凱歌がいかを挙げていたことを発見した。この発見は彼女の義務心よりも彼女の自尊心にこたえるものだった。彼女は最後にもう一度妹の喜びに乗

じながら、彼等の秘密へ切りこもうとした。が、辰子はその途端とたんに、——姉の唇くちびるの動こうとした途端に突然体を伸べるが早いか、白粉おしろいを刷はいた広子の頬ほおへ音の高いキスを贈った。広子は妹のキスを受けた記憶をほとんど持ち合せていなかった。もし一度でもあったとすれば、それはまだ辰子の幼稚園ようちえんへ通っていた時代のことだけだった。彼女はこう言う妹のキスに驚きよりもむしろ羞はずかしきを感じた。このシヨックは勿論浪なみのように彼女の落ち着きを打ち崩した。彼女は半なかば微笑した目にわざと妹を睨にらめるほかはなかつた。

「いやよ。何をするの？」

「だってほんとうに嬉しいんですもの。」

辰子は円卓えんたくの上へのり出したまま、黄色い電燈の笠越しに浅黒い顔を赫かがやかせていた。

「けれども始めからそう思っていたのよ。姉さんはきつとわたしたちのためには何でもして下さるのに違ないなって。——実は昨きのう日も大村いちんちと一日姉さんの話をしたの。それでね、……」

「それで？」

辰子はちよつと目の中に悪戯いたずらっ兎こらしい閃ひらめきを宿した。  
「それでもうおしまいだわ。」

ひろこ  
 広子は化粧道具や何かを入れた銀細具ぎんざいくのバッグを下げたまま、  
 なんねん  
 何年にもほとんど来たことのない表慶館ひょうけいかんの廊下ろうかを歩いて行  
 つた。彼女の心は彼女自身の予期していたよりも静かだった。の  
 みならず彼女はその落ち着きの底に多少の遊戯心ゆうぎしんを意識してい  
 た。数年前の彼女だったとすれば、それはあるいは後めたい意識うしろ  
 だったかも知れなかった。が、今は後めたいよりもむしろ誇らし  
 いくらいだった。彼女はいつか肥り出した彼女の肉体を感じなが  
 ら、明るい廊下の突き当りにある螺旋状らせんじょうの階段を登って行った。  
 螺旋状の階段を登りつめた所は昼も薄暗い第一室だった。彼女  
 はその薄暗い中に青貝あおがいを鏤ちりばめた古代の楽器がっきや古代の屏風びょうぶを発  
 見した。が、肝腎かんじんの篤介あつすけの姿は生憎あいにくこの部屋には見当らな

かつた。広子はちよつと陳列棚の硝子ガラスに彼女の髪かみかたち形を映して見た後のち、やはり格別急ぎもせずとなりに隣の第二室へ足を向けた。

第二室は天井てんじょうから明りを取つた、横よりも豎たての長い部屋だ

つた。そのまた長い部屋の両側を硝子ガラス越しに埋めてうずいるのは藤ふじわ

原らとか鎌倉かまくらとか言うらしい、もの寂さびびた仏画ばかりだった。

篤介きようは今日きょうも制服の上に狐きつね色いろになつたクレヴァア・ネットを

ひっかけ、この伽藍がらんに似た部屋の中をぶらぶら一人ひとり歩いていた。

広子は彼の姿を見た時、咄嗟とつさに敵意の起るのを感じた。しかしそ

れは掛け値なしにほんの咄嗟の出来事だった。彼はもうその時に

はまともにこちらを眺めていた。広子は彼の顔や態度にたちまち

昔の「猿」を感じた。同時にまた気安い軽蔑けいべつを感じた。彼はこ



ちらを眺めたなり、礼をしたものかしないものか判断に迷っているらしかった。その妙に落ち着かない容子ようすは確かに恋愛だのロマンスだのと縁の遠いものに違いなかった。広子は目だけ微笑しながら、こう言う妹の恋人の前へ心もち足あし早はやに歩いて行った。

「大村おおむらさんでいらつしやいますわね？ わたしは——御存知ごぞんじでございましょう？」

篤介はただ「ええ」と答えた。彼女はこの「ええ」の中にはつきり彼の狼ろう狽ばいを感じた。のみならずこの一瞬間に彼の段だん鼻ばなだの、金歯きんばだの、左の揉もみ上げあの剃刀かみそり傷きずだの、ズボンの膝ひざのたるんでいることだの、——そのほか一々数えるにも足らぬ無数の事実を発見した。しかし彼女の顔色は何も気づかぬように冴さえ冴ざえ

していた。

「今日は勝手なことをお願い申しまして、さぞ御迷惑でございませう。そんな失礼なことをとは思ったんでございますが、何で  
もと妹が申すもんでございますから。……」

広子はこう話しかけたまま、静かにあたりを眺めまわした。リ  
ノリウムの床には何脚かのベンチも背中合せに並んでいた。  
けれどもそこに腰をかけるのは却つて人目に立ち兼ねなかつた。  
人目は？——彼等の前後には観覧人が三四人、今も普賢や文  
珠の前にそつと立ち止まったり歩いたりしていた。

「いろいろ伺いたいこともあるんでございますけれども、——じ  
やぶらぶら歩きながら、お話しすることに致しましょうか？」

「ええ、どうでも。」

広子はしばらく無言のまま、ゆつくり草履ぞうりを運んで行つた。この沈黙は確かに篤介には精神的拷問ごうもんに等しいらしかつた。彼は何か言おうとするようにちよつと一度咳せき払いをした。が、咳せき払いは天井の硝子ガラスにたちまち大きい反響を生じた。彼はその反響に恐れたのか、やはり何も言わずに歩きつづけた。広子はどう言う彼の苦痛に多少の憐憫れんぴんを感じていた。けれどもまた何の矛盾むじゆんもなしに多少の享樂をも感じていた。もつとも守衛しゆえいや観覧人にも時々一瞥いちべつを与えられるのは勿論彼女にも不快だつた。しかし彼等も年齢の上から、——と言うよりもさらに服装の上から決して二人の關係を誤解しないには違ひなかつた。彼女はその氣安さの

上から不安らしい篤介を見下みおろしていた。彼はあるいは彼女には敵であるかも知れなかった。が、敵であるにしろ、世慣よなれぬ妹と五十歩百歩の敵であることは確かだった。……

「伺いたいと申しますのは大したことではないんでございますけれどもね、——」

彼女は第二室を出ようとした時、ことさら彼へ目をやらずにやつと本ほん文もんへはいり出した。

「あれにも母親が一人ひとりございますし、あなたもまた、——あなたは御両親ともおありなんでございますか？」

「いいえ、親父おやじだけです。」

「お父様とうさまだけ。御兄弟は確かございませんでしたね？」

「ええ、僕だけです。」

彼等は第二室を通り越した。第二室の外は円天井まるの下に左右へ露台ろだいを開いた部屋だった。部屋も勿論円形をしていた。そのまた円形は廊下ろうかほどの幅をぐるりと周囲へ余したまま、白い大理石の欄干らんかんご越しにずっと下の玄関を覗のぞかれるように出来上っていた。彼等は自然と大理石の欄干の外をまわりながら、篤介の家族や親戚や交友のことを話し合った。彼女は微笑を含んだまま、かなり尋ね悪い局にく きよくしよ所たくみにも巧に話を進めて行った。しかしその割に彼女や辰子たつこの家庭の事情などには沈黙していた。それは必ずしも最初から相手を坊ちゃんぼっと見縊みくびった上の打算ださんではないのに違いなかった。けれどもまた坊ちゃんと見縊らなければ、彼女ももつとこ

ちらの内輪うちわを窺うかがわせていたことは確かだった。

「じゃ余りお友だちはおありにならないんでございますね？」  
(未完)

(大正十四年四月)

# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 春

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>